

埼玉県立 小児医療センターだより

●埼玉県立小児医療センター

〒330-8777 埼玉県さいたま市中央区新都心1番地2

Tel▷048-601-2200 (代表) Fax▷048-601-2201 E-mail▷n581811@pref.saitama.lg.jp

URL▷https://www.pref.saitama.lg.jp/scm-c/index.html



いま小児医療センターで進めていること

事務局長 **かとう たかゆき**
加藤 孝之



昨年4月に事務局長を拝命しました加藤孝之と申します。当センターには新規採用された平成3年4月から3年間在籍していましたが、今回26年ぶりの配属となります。どうぞよろしくお願いいたします。当センターを離れてからは防災に関する仕事を長く担当してきました。当センターは昨年1月に災害拠点病院に指定されており、防災関係でも縁があったということになるでしょう。病院の災害対策は行政の対策と違いはありますが、自分の経験が少しでも役立つとよいと思います。

ここで当センターの進めている取組についてご報告させていただきます。当センターは提供する医療の質を向上させるため昨年度各種の見直しを進め、(公財)日本医療機能評価機構の病院機能評価において高い評価で認定を受けることができました。今年度は見直しや改善の流れを更に進めるため、TQM (Total Quality Management) 推進室を設置し、職員への意識啓発と業務改善の取組を継続する仕組みを整えました。職員が勤務の際に必ず目にする場所と電子カルテ上にTQM掲示板を設置し、感染予防などに関する目標と取組成果を掲示し意識啓発を行っています。患者様から寄せられた要望や意見に対しては、現場の職員だけでなく病院全体で共有し、速やかに対応するという姿勢で臨んでいます。今年度は院内での携帯電話の電波環境の改善を実施したほか、外国人来院者への対応方法をマニュアルにまとめスムーズに対応できるようにしました。

また、先進的な医療の提供を目指して、生体肝移植、がんゲノム医療、CAR-T治療の実施体制の整備に取り組みました。生体肝移植では隣接するさいたま赤十字病院と連携して移植手術を行う体制を整えました。1月初旬までに3例の移植手術が実施されており順調に進展しています。また、がんゲノム医療やCAR-T治療の実施に当たり、臨床検査部門を中心にISO 15189の認定取得に向けて品質管理マネジメントの構築を図りました。本年度末までには構築した体制により第一例目のCAR-T治療が始まるものと思われま。こうした体制の整備は、従前から提供している医療の質の向上にも大いに役立つものと確信しています。

さらに今後、取組を進めるべきものとして、災害に対する体制整備が挙げられます。これまでに地震を想定した業務継続計画の策定やDMATチームの設置を行ってきました。災害拠点病院としての役割を果たしていくためには、スタッフ一人一人が災害時の病院活動に対する認識を深め、災害時の行動をより具体化していくことが必要です。また、さいたま赤十字病院、さいたま市与野医師会との連携が非常に重要です。関係機関のご協力をいただきながら、災害対策に関する研修や訓練を実施していきます。また、近年、強力な台風による被害が発生しています。当センターでも昨年の台風接近の際に、在宅医療利用者の来院に備えて、電源やスペースの確保、来院時の受付手順の確認を行いました。今後はこうした激甚化する風水害に対する対策も講じてまいります。

現在、県立の4病院では令和3年4月の地方独立行政法人への移行に向けて検討を行っています。法人化に向けて、職員の身分変更や各種の規程・システムの変更など多くの事務を進めていくことになります。より良い形で新たな小児医療センターのスタートが切れるよう、準備に力を尽くしていきたいと思ひます。

引き続き、小児医療センターに対するご理解とご支援をお願い申し上げます。

埼玉県立小児医療センターだより 第16号 ご案内

- 事務局長あいさつp. 1
- 臨床研究部の紹介p. 2
- 小児外科の紹介p. 3
- 11A病棟の紹介.....p. 4
- 薬剤部の紹介p. 5
- お知らせ
瘻縮治療についてp. 6
- 受診の案内・病院へのアクセスp. 6



<診療部門紹介①>

臨床研究部



部長 なかざわ 中澤 あつこ 温子

臨床研究部は、2017年4月1日に新設された部門です。臨床研究とは、病気の予防・診断・治療方法の開発や、病気の原因の解明、患者さんの生活の質の向上などを目的として行われる医学研究であり、治験等の臨床試験、患者さんへの介入を行わない観察研究と基礎研究で得られた知見を臨床に応用するための橋渡し研究に分けられます。患者さんのためにより良い医療を提供したいという思いと病気の原因やメカニズムへの探究心がこれらの研究の原動力であり、多岐にわたる小児疾患の専門的な医療を担っている当センターは、豊富な症例を用いたさまざまな臨床研究を生み出す潜在能力を有しています。医療スタッフが業務を行いながら研究ができる環境を整備し、研究者の支援を行うために、臨床研究部には、実験・研究を行う臨床研究室、研究費の申請・管理をはじめとした研究関連事務を行う臨床研究支援室（事務局管理部）、動物飼育室の管理や動物実験に関する研修を担当する動物実験管理室の3つの部門が設置されています。

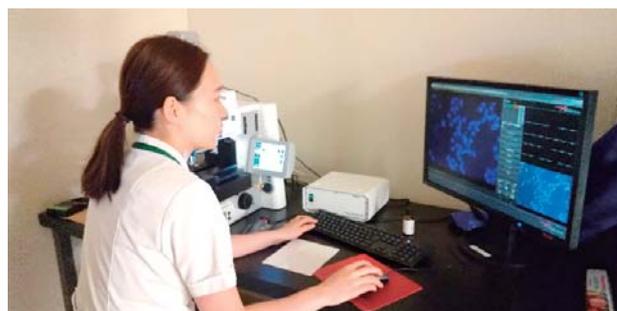
臨床研究部は2017年9月に文部科学省の研究機関として指定され、2018年度より科学研究費の交付を受けています。2019年度の研究員は医師12名（兼任11、専任1）で、臨床検査技師2名（兼任1、専任1）が研究業務と研究室の管理のほか、「がんゲノム医療連携病院」、「キムリア実施施設」として先進的な医療への取組みも行っています。2018年度から行っている小児がんの検体保存は273件となり、2019年度からは肝移植の検体保存も開始しました。また小児がんの正確な診断に欠かせない遺伝子検査（FISH）も病理診断科と連携して行っています。小児がんの検体は県立がんセンターとの共同研究として遺伝子パネル検査にも提出し、解析結果を専門家会議で検討し、新規治療法の探索に役立てています。さらにCAR-T細胞による白血病治療の体制づくりにも参画し、臨床研究室では患者さんから採取したリンパ球の細胞調整を担当しています。

医療現場ならではの臨床研究の推進と先進的な医療への橋渡しができるように、スタッフ一同努力してまいります。今後とも皆様のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

スタッフ：中澤温子（医師）、坂中須美子（臨床検査技師）、本田聡子（臨床検査技師）



白血病細胞の保存



小児がんの遺伝子検査（FISH）

<診療部門紹介②>

小児外科



科長 かわしま ひろし
川嶋 寛

一般的に小児外科は、消化器疾患、呼吸器疾患、内分泌疾患、腫瘍疾患など、頸部から胸部、腹部のあらゆる部位を担当します。当院でも、小児に代表的な鼠径ヘルニア、虫垂炎などをはじめ、食道閉鎖症や鎖肛などの新生児疾患、肺分画症やCCAMなどの呼吸器疾患、GERDや胆道拡張症などの機能的疾患などあらゆる手術に対応できる体制を整えております。特に当院では内視鏡手術を積極的に行なっており、新生児から成人期まで年齢を問わず、あらゆる疾患に導入することで患者様の負担の軽減、整容性の改善、機能性の改善に努めてまいりました。鼠径ヘルニアや虫垂炎では、お臍から内視鏡や鉗子を挿入する手術（単孔式手術）で傷が目立たない手術を行っております。当科では内視鏡外科学会・技術認定医が2名在籍しています。昨年は大変多くの患者様をご紹介いただき、年間約660件手術が実施され、内視鏡手術は約330件と半数以上でした。

小児疾患では急性虫垂炎をはじめ、鼠径ヘルニアの嵌頓など緊急手術や救急の処置が必要な疾患も多いことから、ERと協力し24時間いつでも救急の患者様のご相談に対応しております。また、昨年よりさいたま赤十字病院と連携した移植センターを開設しました。当院では小児外科と移植外科が連携し生体肝移植を行っております。その他、新生児疾患では周産期医療センターと協力し新生児外科疾患への対応も行なっております。外来診療は月曜日、火曜日、木曜日に行なっております。その他、鼠径ヘルニアや虫垂炎など急ぎ受診が必要な場合、症状の時期が分からない患者様などのご相談も随時承っております。

さいたま市をはじめとする近隣の医師会の皆様、また埼玉県内の医師会の皆様のニーズにお答えし、県民の地域医療に貢献してまいります。

〈スタッフ〉

小児外科

川嶋 寛（科長・内視鏡技術認定医）、石丸 哲也（医長・内視鏡技術認定医）、林 健太郎（医員）、小俣 佳菜子（医員）、産本 陽平（医員）、合原 巧（医員）、高山 勝平（レジデント）

移植外科（小児外科兼任）

水田 耕一（移植センター長）、井原 欣幸（医長）、平田 雄大（医員）



明るい手術室の入り口



3D内視鏡による腹腔鏡手術

<看護部紹介>

11A病棟



あきやま のりこ
師長 秋山 典子

11A病棟は、感染免疫・アレルギー科、総合診療科、消化器・肝臓科、神経科、代謝・内分泌科を主な診療科とする内科病棟です。28床の病棟には、発熱や胃腸炎など感染症状のあるお子さんや免疫が低下しているお子さんが入院するための16床の個室があります。そのうち、水痘などの空気感染する感染症や新型インフルエンザなどの新興感染症への対応ができる陰圧管理病室が4床あります。



看護師は元気いっぱいです！！

感染免疫・アレルギー科では肺炎や腸炎などの感染症・免疫不全・川崎病のお子さん、総合診療科では在宅でも人工呼吸器などの医療的ケアが必要なお子さん、消化器・肝臓科では消化管アレルギー・内視鏡検査が必要なお子さん、神経科ではてんかん・けいれんのコントロールが必要なお子さん、代謝・内分泌科では新生児マススクリーニング検査の精査が必要なお子さんなどが入院しています。

最近では日帰りでの治療や内視鏡検査なども増えてきています。特に、内視鏡検査が必要な炎症性腸疾患は、成人領域だけでなく、小児領域でも患者さんが急激に増加しています。子どもの

内視鏡検査では体格が小さいため、大人に使用するよりも細い内視鏡を使い検査をします。また、内視鏡に対する不安やストレスを感じやすいこと、検査中に動いてしまうと危険であることから、内服薬での入眠、または全身麻酔をかけて行います。下部内視鏡では検査前の処置で腸管洗浄剤を大量に飲まなくてはならず、入院後も浣腸が必要であり、お子さんにとってつらい処置がたくさんあります。私たちはお子さんとご家族の協力のもと検査がスムーズに行えるよう看護を行っています。平成30年度の11A病棟の内視鏡検査の件数は188件あり、うち72件が全身麻酔によって検査が行われ、年々増加傾向にあります。外来や手術室、集中治療室と連携し安全に検査を終え退院できるよう支援しています。

病気に立ち向かいながら、日々成長する子どもたちの姿を実感し、個性ある子どもたちとの関わりは笑顔にあふれており、それを実感できることが看護の醍醐味だと感じています。



お子さん一人ひとり優しく丁寧に対応します



おもちゃがいっぱい、明るいプレイルームです



病院キャラクター「ピアノ」がお出迎えます



<コ・メディカル部門紹介>

薬剤部



「薬剤部の現状と今後の展望」

薬剤部長 しまざき ゆきなり
嶋崎 幸也

薬剤部の業務には、調剤や注射薬の供給などの対物業務と、服薬指導や病棟薬剤業務などの対人業務、そして、これらを支援する医薬品情報業務や治験管理業務などがあります。なかでも医薬品を安全かつ適正に使用するための医薬品情報業務の役割はとても重要です。そこで病院移転の際には、設備面の機能強化に加えて、医薬品情報室と治験管理室を整備・拡充して、小児医療に必要な医薬品情報と治験実施のための体制整備も行いました。このように、薬剤部では医薬品と人（患者・医療スタッフ）をつなぐ医薬品情報を軸に業務展開を図っています。移転後3年が経過し、病院機能の強化と歩調をあわせながら、徐々に成果が現れてきました。

小児病院における調剤業務では、新生児から成人に至る幅広い年齢層と発達段階に対応した調剤を行うため、同じ成分の医薬品でも、シロップ剤から坐薬、錠剤など、多規格かつ多剤形が必要です。また地域で対応できない専門医療を提供するため、稀少疾患の治療薬も数多くあります。このため採用している医薬品数は1,300品目以上にのぼり、これらを使用する際の医薬品情報も膨大な量になります。小児に医薬品を使用するには、添付文書の情報だけでは不十分なため、錠剤やカプセル剤を粉砕した際の溶解性や安定性、味覚など、さらには注射薬の配合変化やフィルターの通過性、分割使用時や溶解後の安定性など、多くの情報が必要になります。



小児用剤形の開発が望まれています

しかし残念なことに、国内で使用されている医薬品の約7割は、小児の薬物療法に最適なものではありません。例えば、細粒剤やシロップ剤などの小児用剤形がない製品も多く、また添付文書に小児薬用量の記載がない場合もあります。国内外の資料をあたって、必要な情報が入手できるとは限りません。日本では欧米のように医薬品開発の際に小児用剤形の開発を義務付けていないため、小児の医薬品開発が立ち後れています。このような背景もあり、小児薬物療法に必要な医薬品情報の収集は薬剤部にとって重要な課題となっています。



安全キャビネットでの抗がん剤混注

最近の話題では、全国の小児病院で薬剤師の病棟常駐が始まっています。当センターでは、薬剤師が各病棟に常駐する段階には至っていませんが、小児薬物療法にかかる医薬品情報の提供と収集、抗菌薬の投与設計、抗がん剤化学療法レジメンのチェックなどの業務を通じて、病棟での薬剤師の活躍の場が徐々に広がってきています。近年、小児治験が推進した恩恵もあり、海外とのドラッグラグが縮小していますが、その分、安全性について十分な情報の蓄積がないまま臨床使用される状況も生じています。この部分は、薬剤師が医師をはじめとする多職種連携のもと、適切な医薬品情報の提供と有害事象の収集に責任を持って取り組むべき課題であり、今まで以上に医薬品情報の体制整備に努める必要があります。

また、「働き方改革」の流れを受け、医師業務のタスクシフティングが検討されています。これには薬剤師による代替が可能な業務も多くあり、今後の業務展開に期待がかかっています。薬剤部ではこのための人材育成として、小児薬物療法認定薬剤師などの認定取得を支援し、年を追うごとに認定者数も増加しています。このほか、対外的な話題として、小児総合医療施設協議会（JACHRI）のネットワークを活用した施設間の情報共有や多施設共同研究への参加、また地域薬剤師会との定期的な情報交換を通じて疑義照会プロトコルの導入を検討するなど、多様な連携が進行中です。

いま、薬剤師の業務が大きく変わりつつあります。薬剤部では「連携」をキーワードに小児医療の発展に貢献できるよう、努めてまいります。

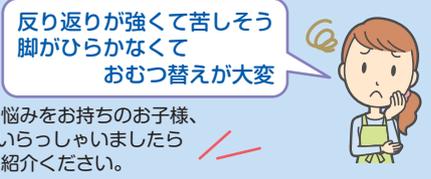


手術室担当薬剤師による薬剤管理

お知らせ

痙縮治療外来のご案内 ～ITB療法はじまります！～

当センターでは脳機能障害(脳性麻痺等)に伴う^{けいしゆく}痙縮に対して、経口抗痙縮薬やリハビリテーション以外にボツリヌス毒素療法、選択的脊髄後根切断術、整形外科手術を実施してきました。2020年からバクロフェン髄腔内投与療法(通称ITB)も追加し多様な痙縮に対応できるようになります。各治療の適応は、「痙縮治療外来」(毎月第1金曜日11:00)で多職種で評価し、ご家族へ提案させていただきます。体のつっぱりでお困りの患者様がいらっしゃいましたら「痙縮治療外来」宛てにご紹介ください。



このような悩みをお持ちのお子様、ご家族がいらっしゃいましたらご紹介ください。

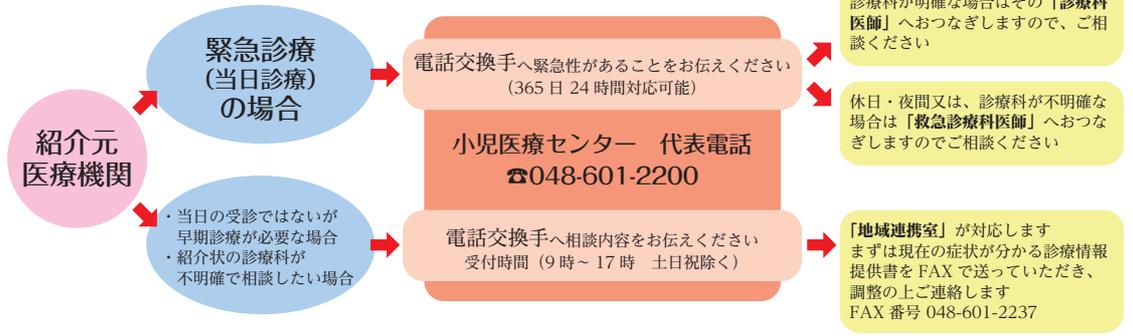
受診方法
 下記の「受診のご案内」に沿って予約センター(一般外来)でご予約ください
 ※頭部 MRI 画像データをお持ちの場合、持参いただくと検査を省略することができます。お手数をおかけしますがご協力よろしくお願いいたします。

医療機関の皆様へ 受診のご案内

①患者ご家族からのご予約



②医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ



病院へのアクセス



■公共交通機関をご利用の方

- ・JR京浜東北線、宇都宮線、高崎線「さいたま新都心駅」から徒歩約5分
 - ・JR埼京線「北与野駅」から徒歩約6分
- ※歩行者用デッキを点線に沿ってお進みください。

■お車をご利用の方

- ・駐車場は有料になります。
 - ・機械式駐車場には車両のサイズの制限があります。
- ※ご利用の時間帯によっては、車両が集中し、入庫まで大変お時間がかかることが予想されます。できるだけ、公共交通機関のご利用をお願いいたします。